862
160

日本一統志

八十五之四十五
六　七八

四十二

類號冊
42

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3-1

帝国図書館蔵書

日本一統志巻第八十六

目録

一

福原達夫氏寄贈本

福原満三郎氏記念図書

大正・昭和 帝国図書

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻之八十六

拂て其の勢ひ上方勢を拂加へ内府公清洲
陣の先きを遮りいふ〳〵出張あるの
報の変々出まんでを井伊幸多吳宗遂にて舞
込を見えし〳〵四月方へ居城の功とあるよ募し
うかゝ悪去源しる倫み営ちうう
是等の巳下四月のこ矢早馬とあり〳〵井伊直政方る
ト上杉為て会津重〳〵領し
廿三日廿四日廿五日の四度迄の許しうか居みうう意
くかな〳〵る所〳〵遠国の勢ひ徳城々名将の出軍既
ハ此んの出軍既をれり第一とせうる一ト域〳〵

依て直政同代の井伊右衛門尉直孝
六中渡城を清兵黄門仁勢ひ下まいとやまを
多れ百引山路ふ〳〵恵を渉重て迷て稲沼
家の澤井左兵衛勢ひ勢ひ若き事迄左
衛門佐と仙女のまことを以〳〵山路一同ま幸九へ入
て万事と約〳〵けれ女のか一ト仙俊之
千時波皐中納言秀信仁当年廿歳右大臣信長
公の御孫程有〳〵我ら屋城〳〵居
人と如何ハ一ふの事ふ能ふまりけれ所
我の次第を以〳〵籠城の当を非ふまりけれ
ふま一言の座言句とて

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

出る軍門に紋模毎さみ仰ぐのまいくなみ
歩り好候たみ又布さる雪士三十六人け中み我助
ある宝へい物今根武田奥るとを好り一
威伏の以下未遠左馬佐ま〳〵お後まく三十二通を
とおさり石田方さり加勢の川瀬左衛を物告を
支人汚重ね下名物をを一礼かしい若年の子と
しく汚急重かるの変我ら信好松寿の出
以人左無重の後をや文上方一味かく陣家とも矢
る猿をれ実初の約束の通り関東方とおって
出羽守候濃ふる羽守二百名の郡関府そる

織田出羽守國光れの屋敷の玄関の書四十八万八百石を拾
合せ六百四十万二千二百石の大名とおおせて及未代
徳川家古陣器かすまきた天下の諸大名の上席と
出る孫未代かしのまで
筒門秀信公落城汚重迎の初に出陣のを賀小
北十四人いく褒物をさり取代井伊
幸文の家中告急に信てけれの陣る門府そ年
さり出る初め汚鷲勢れ有しかい徳川家陣川忠
の信長之的後の出婚孫左さり代よ年幸尓の命
天い智〳〵五千里関府そ八十名の御国出九し

いる事卯の柱号という懇意のお達ありて
答礼ありし処池田家と姫大小名を清如水公
もかえ家み得ざる一種の外聞無きの格段い右の
状況をえて実ならめ事知有ることい為ら
の中にも波辛苦の落着ら戦争ありて
家ら発塞ありて度実ならざる知ること
実ニ東大合戦前ら発端ら清如水利

運ら良内府公於御前ら清辛苦ら
長の嬌しの筋なれい後ら行程の実ら御国
家ら為ら大名ら知ら報切接ら行ありて右
金ら一発と家康公清如水ら
ら用ありり家康ら仲平天の照応かも計秀信
一の女婿路信長ら敵思ら
味方ら実ニ一枝ら人いる一の上座とし
尾張二ヶ国を与ら形ら
対ら其ら石能ら家ら
信若ら存ありり石田ら格ら

報信長ハ家康ヘ対シ無ト云ヒ
清三郎ハシト云ヒ忘ル也害サセヨシ云ヒ
思ヘハ云甲斐モ度々有シ事ヲ
其ヲ今一思ヒ出シ給ヘ敵ト敵ヲ
ソノ妹聟ニ呼ヒ仇ヲ報ヒ
トヒ仇ヲ招ク在ル仁ノ道ニ
徳川譜代ノ面々ハ織田家ノ
一石運ノ秀信ヲ取立ル
ヌル織田ノ子孫ノ相続ヲ
孫天命ニ違ヒノ道ナリ
孫辛ノ未ヲハ蔵ノ下ヲ
記ス滅亡セシムル織田斗
モ国主モセン云ヒ
云ヒ是利ハ是利ニ云ヒ
ノ滅亡トヘヨ小栗モ小栗ト云ヒ
云ヒト云物ヲ云々
ヒヲ家ノ妻ト棒ニ天命ヲ
或ハノ子モ皆同ル
不然天下ヲ配ル或ハモ天
ヲ国ニヲ出ニ取ニ取ト加ル

我ものとなりて常に天道をうち恐れ我身を
高ふくの役人をうち思ふ事もうく我
侘もうくあるまゝ物をうち秀行の家来東西と紛
小児に等しく三郎山の麓へ逼塞させ罪罰り
苦と仰付させよ三十歳と称と称して天命と知
るべしおてゝ我方へしたがい降参仰付られ
と浅香の庄も召上られ流し給ふ事のこと
居候服部石うち侘しうち師の麓向副村田中へ
僧の居宅と作らせ是へ参会ありの八十騎
ひ行ける所なり慶長十年六月八日於田中と

廿二日ゟ〳〵城へ逃去るしかば
則て次日城居去ゟ夜火のよふ物有城中か
ら不思議城まの家宿鳴家ゟて動とゝく
井伊掃部頭直政ゟ徳川家の家
人敵城を乗入ゟて三の丸ゟ人の当城古来ゟ
ふ事なき毛家の動事ゟ此の外とゝく事九
池田三九ゟ大ひに城〳〵福島家ゟ毛家を
城中ゟ三八月廿二日の夜ゟ
しとゝく
去程ゟ大山城を押へて陣れゟ冥土智の

中にも薄雲高光元春の大将
城中第一の八万の人数命を捨て戦い雲霧野
陽利を得んため千の人数いかめ〳〵敷連り
合戦丸四方より取巻き籠中第一城の切所
まと以下兵三人元の門柱稲妻作兵入道一騎駆
の家士孫大八郎の雪士ら打中まで追懸ら
将の冊なる乙又うなれ丁
誠勇角遠まで〳〵城中も追懸さすが城
中ら打入てもも和ら中第一の高
長政のほう延ら大音上て降参又高ら

完ん〳〵として作兵ら後の
兼ら計帰中〳〵支度の為ら人いまく
長政と始〳〵いそ人も千五
ん今日まも勇ら元の大名ら持て
出〳〵叔父の外かに
天下於形の雪士将千ねの為
の大名元まと云為度又高元雄
者もの〳〵主人甲丸なる高まま
度ら外の又高ら一言かしも法
長政おいそう家来のう
〳〵今大将軍作

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

しろ山城の押へとして遠ざ
使とて五百ずつ舟をもて
ず此まもりとして波辺いま
波ずまで永く逗留内府ゟ
此ごろ一通当城へ為よと
ふたり一通ハ城中ゟ
ふたりとも城中の
ずつ城ハ渡さぬ
城中の名ある人々
ずつ又此の
ずつ来ル
落ちんとの結構いつ
城中の名ある人々
ずつ又此の
ずつ来ル

指南

黒田甲斐守　　芸州
田中兵部少輔　　尾州
蒲山伊賀守

右の人々元ゟ合て評義ゟ
石垣ハ堅ゟ
府へ引ゟ
此ごろ波辺ゟ
ふたり一通ハ城ゟ
ふたりとも城ゟ
落ちんとの結構いつ
城中の名ある人々
ずつ又此の
ずつ来ル

歟の如きを以て云々
頭軍使を以て云々
上方勢大軍にて云々
の一なり云々
て軍使の功をなし云々
うみ三方の後詰来り云々
又威勢を逞しくして云々
候ハゝ云々
波皇会戦を云々
ハゝ敵方の荒手を押来て云々

こゝをよく行き抜き
同序を以て運の吉北に大山押への如きを云々
ハゝ広中波皇会戦を按まで云々
ちなれハゝ海辺の方へ引取て云々
て敵兵あと云々方の抑を破り小生駒波皇
る歟正同社中次第云々
なきの外味方各々勢を云々
云ハゝ味方の競ひ四千余の内加りしハゝ黒田筑
尝国中戸川奈良の人々弟戸川端
へ押出し候ハゝ黒田甲斐ちと長久ハゝ備後へ引取

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

会及び同代参行事その他一切の後
会銭の取扱中せ〳〵大山の神へ年寄名代
両方へ参詣の節万一会中より
神戸門向川筋を上方筋後年
うるや物えとをし〳〵え御用
けん方へ為銭ゟ参詣いたし
候得ば一統相談の上
ハ定軍法を守る料・いろ〳〵
ハ徳意有し候ハ仕度ニ
候間平の分ハ〳〵
ハ黒田筑前守様ゟ井伊掃部
ハ黒田筑前守様ゟ井伊掃部頭様へ
ハ定軍法を守る料・いろ〳〵
ハ徳意有し候ハ仕度ニ
候間平の分ハ〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

川之書ヲ主ト称テ味方ヲ
討ヘ波皐合戦ノ大利ノ
令ヌト焼ホロヘ上ヲ後信
んのホンヲ云ヲテヲ
ヲヲ免ヒヲヲ辞
ヲ庶井ヲ出ヌモ万
ヲ松モ年八ヒヲ
書ノヲ官遂名ヲ
弱ヘ為ヲ徳将ヨ波皐
八信ヘ源ノ仕合百里モ力
代登リ徒川ノ
東海道ノ者ヲ
ヲ大垣ヲ湖ヘ今

来ヲヲ信ノ歌ヲ十万ヲモ共ヲモ
やふい皇国ノ使者ヲ家ヲ名代ヲ使ヲ
村城善助ヲ遣ヲヘヘヲ古ヲヲ後詰ノヨヲ
智ヲ井数ヘさいてい皇国若ヲ始男ヲヲれ
ぬまヘ能ヲノ外ヲヒヲ家ヲ言モ勿体
ノ遣ヲ斗同ヘヲヒヲモ
い善助ヒ

村城善助皇国若ヲノ使ヘ家外ヲ事

附田中方ノ方若善助後若又ヲ孤立撃ヲ

某田中ヲ於ヲ裸ニ遊流主人ヲ陣取ヲヲ

斯て黒田の使のさまざま一通り
長政と呵て其合ふ云ひ訳ても叶ふ是
ハ汝の死命ふさふ云共ち
其の後信ひ方ふ礼ふ
家ふ一統ふ如ふ黒田の使とそん
て筑前田中ヶ門奈ふ処ふ
出ふ水湖七八町ふ出ふ
幸ふ人ふ一使ふ
ふ云人と誰ふ云ふ
一家ふ云ふ某ふ云ふ
信へふ郷ふ男ふ立ふ
あれ黒田甲斐ふ向ふ
ふ一ふ云ふ中書ふ
ふぬけふの運ふ
出ふふ村誠ふ
ふ極ふ利ふ
ふ何ふ
ふ之ふ
十ふ

て川向の歌と題ていひけるの歌中古万葉
と秋深み手束弓ふゆ立てる那賀の
の名代村誠義助吉重又ふるさと大
言とて吟ずる名行をえ
笹原の梅を我しる源とえ花て問ふ人
為ぬ手折ねえ人ぞ知ける一ふ源と
行ずる馬を一時吹一叶ふ
ー浩水みな増り流ふ実用代ふ
名一人手折ねえ一ふ源と川瀬近い一夏ふ
ハ渡ー雁ー香ヶ鳴の渡ふ
ー雁ー香ヶ鳴の渡ふ
ー雁ー香ヶ鳴の渡ふ

み流矢しきりに至るといえども物
ともせず敵の渡らんとする川のさま
〳〵の浅深を馬〳〵乗知の
しるべをもって黒田家の侍ども後又を顧
ず甲の孔雀の尾の指物を
天衛の指ものも思い〳〵に掛ゆる
旗をおし〳〵水深きを歩行川を
歩の川ハ三ツもありける中の川を
よるよる文禄年中朝鮮の
うまり〳〵川幅の水のくもこれ大川向ひ
那ら六十万兵卒鬼神
の漢南城八十里の川中をこれ柵
おし〳〵もも行き通る家入大
多〳〵の味方を助け漢南城
和よりしい而〳〵兵し定て
自焼の気ら川も酔〳〵祥〳〵
て敵軍の参じ又ちかうや信い唐へ引ても
ても止ぬ世の指物旗指物の
ばら〳〵指ものを旗指物と
痛も世ものや指物を出ん

ちなめる〻按病人の行を扱ひ〻計死をふ
厥別共の行と文多ふ苦み治〻中さふ
と行と醫共に坊とう黒皮膚共陣扱成ちと川を
添めて吞〻う醫ふ共とおよび味の噂云教〻ち
をと思雑云虜云人と人ともも思つぬ新生物き奴う
なの名人力曽も八人力曽ち仕方荒と御と云お横云
おあ〻い死我ふとていと虜云仕きそよ荒こる
しの先生田中秘死の士ふ〻ち列う後首ふ荒

項ふ云ふの来寺経〻の方〻指千降〻て和〻う
云来稜なの荒〻助云う思〻の人御〻前さ
よ今あ〻世う仕そはな物のふ入行な出来る雑云
虜云程〻小寺猴ふ麻云ちと思〻寺空〻〻
なふ延居小計荒と助ふとと服常ふ〻力例〻
とと〻そよか〻炭焼の病云とえる杭成物成
川張〻場の源吾ちさう病ふ〻て稜〻の言成
ふ〻黒ちふから再ひ〻大ふの言いなへとふ
のう実八月八十一年お横ふとて有うるふ
十九人まて三年の内ふ校教〻ふ云う募

[illegible]迄今廿年ニ[illegible]代[illegible]
[illegible]〳〵[illegible]けり南云院花又[illegible]
[illegible]ぬる〳〵振〳〵[illegible]
[illegible]り〳〵云ひ〳〵[illegible]
十九人迄投数〳〵誉有之此源
[illegible]士[illegible]ぬ[illegible]
云[illegible]武士[illegible]
次八十二家[illegible]人[illegible]十五迄
所もよと有[illegible]
[illegible]年八家[illegible]

[illegible]禄[illegible]
去り[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一族共ら働き八〳〵と命の備の為め遁もイヤ〳〵吐と儕ら大の敵を投打れて是迄来り——田中ら云一度ゟ二三人血を吐やう絶入やそれ同士討と田中ら云一度ゟ黒き液を討んと云ふ〳〵ら〳〵ら〳〵ら

六人の兵中唐人有て川を表の口論をなさんと云
（ま）ゝ先（ず）〳〵立て下知をなさんと拵て
居（る）を（ま）ち〳〵の旅宿佐渡ら名人の手伝ひ元方
不残ず長汐へ向（ふ）〳〵ゆかんあの川筋を黒舟
元ゝ渡（る）又々舟切（り）〳〵川越乃
お侯（ふ）のまゝ有（る）を長汐
以不及（ん）と渡（る）行（き）〳〵て舟切（り）捨（て）
捨（て）ゝ〳〵と元ゝ居（た）ゝ無双の合戦切（り）
軍（い）ゝ方ゝらふ及ぶ（ま）ゝ
朝鮮迄（ま）ゝ並（び）と有（る）ゝ長汐

ハ小舟を以て又合戦と成（り）黒舟を振（り）
山の動（く）〳〵ごとく近（づ）く虎渡（る）を向（ふ）へ
いるゝ渡（る）ゝ川渡（る）ゝ
して合戦の指図の声
兼（ね）て定（め）の事乍ら方々
引（き）ゝ退（き）ゝ川向の敵を
円渡（る）居城の上ハ渡（る）
会（ふ）馬と川入（る）ゝ必定（ま）ゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

元いつ頃の名言男にて
大名道人共大なる出来一事
ひく〳〵み武功を顕し
八行と申候通ふ〳〵小船
渡り為番ケ浦へ出てても満
津不来候川向の歌を見れ
川元中ひとり指ふ向ふ
水風をぬさにく家々の渡
らい世門と三遠川若又流切
り〳〵無二ぬ〳〵押掛〳〵一戦と
て

て〳〵ぬ方をたゞ〳〵羽翼まで
渡り有る事ぶ方様の万ぬ
のお供にて言もいつ〳〵
立〳〵通る手代の雪士乃渡
年忘といふて厚〳〵のお酒
供の待〳〵〳〵為尋る虎
〳〵と黒西気ぬ〳〵立〳〵渡
警甲をおき武士の人参と
て方一言ふ事ぶ〳〵川の酔ふ
潮みとぶ〳〵一戦〳〵雪と

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ことを入れてさていれ川を流し
の汲をと拵置せしかゐ女人
くと馬を寄て川へさん
の一番家田中氏の婢内平
なくて名乗り逆はらく溺せしを
ていかゞ言名とゝ抱て唯今
とえ兎一乗りて続く家
か一田中氏の婢川端へ馬
て黒田長政のよう月ヶ瀬の
若挽ちう嫡子月ヶ瀬右馬丸生
不敬二当歳
長沢田中氏の婢か婢黒田甲斐守長政卿
言葉を始とく究竟や今
水底へ沈むを兎てい居
い家也

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

関隘

一 後夏又曰黒田一ノ川越一ノ峯ト名ク事

一 府後堂黒田ニ至ル石田三成後俊カ切崩ス事

一 府前田中ヨリ辻勘兵衛小西方松江勘ニ討死ス事

一 古田ノ後ヲ父子東面ヘ分取府ニ帰ル事

一 府村越茂助法則ヲ以テ使仕深立帰ル事

一 府内府ニ於テ番所悉ク壊ス事

日本一統志巻第八十七

後筏又名沈黒田一名川越一名
附筏壹黒田西北石田二城後俱
并田中一ヶ辻堂小西方松前各沈
那て黒田甲斐守長政小西攝津
守行長又各沈川の淺瀬を浪
の立様の形とかく見えしより
のうまの組と名づけ一名馬川
と云へとも長政の方へ中
を割り指とて水とまりる事也

名乗なの共そうには前々の名字一ハ落居
なれハ退去一ハ御文古来ハ家紋有るいも石橋
家也まゝそまなれハ仔細也て番と云一つ
古代味通代武田信玄の法度所々城を家ゐ
川と誠ニそまる家り対配せるう川中り家成
果いハ御と功か一唯なをの武をて云年ゐり
武功とい号一雖し御家ゐて於ゐ物と振
出たゐ当ふ史のまと上るう是ゐまる家りれ武
功かり
み川城のまいゐりもいれハ名字不及向へ渡り海

一家へ上りれ名字一是川城の主書舗の武
功ゐりと口味ゐて一そり迄年天下憲一もて
信依一ち矢の吟味落尼家り一ハ方と用ゐ
なり不味の家いち御法ふ一後前又会津ハ武
雪斗いも物一た有の事統元一会れハ今日
主人長ハ話なれ家東一第一の武功とおまへ
年
打ゐま家東勢川と井城一ゐ向へ家り
上りハ方智の中ゆと鴻津家ゐ三丁迎て小
西行津守と向合て備と云れい字表家の智一

石田三成ら勢川ら向みむ…退て本陣ら
繋掛ら下左右のよそと羅下…
の上ら場ふく…黒田長政と…
号せもる…秘蔵の…面の方ふ
勢と見…歌の後ふへ本く…
いてい…ふ…ふふ…
ふく…ふふ…ふ…
ら本て八ふい田中…
と見へら生駒父子戸川…
掛ら見へら田中ら備と…
備之中合ら…大軍の…
退去也生ふ味方の…
く家康公御…
生行と云ふ…
なまい迎ら…
庭かく…
退く…
とさく…
大名中ふく…
ても大音上く…

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

…庭ノ…ヲ入ル…ヲ…ヲ…ヲ

紀伊守ニよん来宇喜多忠の士大和守実の罪
科を攻ものせ〻ま〻一根のおも〻
紀伊守ニおゐ〻自害ありし宇喜多家今日の後
長舟ら皆先よれ有〻ぬ同果られ小野なの〻方
川紀伊守無難れめ〻憤激甚来の智ありる
の独先二十年ら抜抜八十挺左右ゟ立〻一対一玉
放〻石原寿と指て独と入〻れ〻抑
立〻る奈山伊賀ら二陣ゟ速て小多同士ゟ
午生死一不ら続ケ〻方川ゟ紀伊退ら
喫呼て迫入りれ八石原宇喜多の三武の備ゟ抑
崩て秀家の旗本すて岩を抱ると方川奈
山退ら〻切崩ら
石田治部か陣三成新切ら宇喜多
立〻ハ寡ら東方田中吉政ら
ら石田家臣ゟ元て宇喜ゟ
立無ら他と当よ〻云甲斐
て散〻の敵軍と成〻
備と立変あよ〻馬ら
田ら切ゟ奈ゟ吐〻ゟ抑立て
田中ら切午曳〻ゟ如立〻

西の方くより早雲寺殿堂星田安芸の勢いまつ神
竹内下後藤又兵衛細川勢と言へども九ツ
ち扶助とゝ射すくれの援兵右三面の軍東
頭くより我と入れかゝるよと大音声にて下知をれば
日比なくの旅よの共駒を早めて
竹くく実説くく後くより岸和
智の実なり石田宇喜多二万三千の大軍なれども
備と言葉源よりも後堂と言る虎黒田長政を先
一同よ凱声を上と揚くく入勢り
揚之

の八石田三成、ゟ早う三百人程引連奈良の伊賀守殿の
所を宿揚くく春日川と言寄東方の諸大将等
くみ首えか辛実平実検くく大津の敵そく人
石田の首ゟ天下一統なる祝ゟ酒盛
の宴乗勢よ先と早くく前後左右挟箱三十文字
に実て通ゟ宇喜多石田の兵勢可叶相あれ
くく安家兵の物取ゟ戦ひ十丁余り後ゟ
る代宇喜多勢石田勢ゟ手負ふ負知石田ゟ物
頭松江勘兵衛と云十人力量の剛の者成ゟ我ゟ
仕ゟ皆川土ゟくく馬と宇喜多くく田中

公訴起這る寃之の士を十ゝ人ゝ馬上ゝ
ゟ〳〵一家ゟ一ゟ〳〵ゟて風ゟい物のゝ事なる
武名振ゟゟ〳〵と田中ゟ中ゟ迄勤ゟ物と
云ゟ大勢ゟゟゟゟゟ安堵ゟと今ゟ〳〵ゟゟせ
を三成方の勤ゟ物深と風ゟ自慢ゟ名ゟゟて
川ゟと田中ゟゟか慥ゟ長柄大将の迄勤ゟ物と
名ゟて迄掛ゟゟ物勤ゟ物ゟゟ庵ゟ抜
同一名ゟ〳〵ゟゟ東面の物頭ゟり是と今日の
指頭ゟゟゟ仕ゟん名ゟゟゟ六ゟゟ一東の勤ゟ物
いさゝゟゟゟ馬ゟゟゟと迄勤ゟ物ゟゟゟ奴

ゟゟゟ不持ゟ刀ゟ抜ゟゟ大力
ゟり我ゟ力ゟゟゟ力量ゟ及ゟゟ両の勤ゟ物ゟ
一ゟと云ゟゟゟ〳〵馬の物ゟ両ゟ向ゟ一ゟ両の勤ゟ
物ゟ迄ゟゟ成ゟ者〳〵迄ゟ〳〵指頭ゟ〳〵ゟ寄ゟ
ゟゟと云ゟゟ〳〵東の勤ゟ物ゟ両ゟ勤ゟ
ゟ物ゟの一ゟ〳〵ゟゟ実ゟ〳〵と迄ゟん云ゟ比ゟ奥ゟゟ〳〵実
ゟ云ゟ〳〵股ゟゟ力ゟ強ゟゟ〳〵ゟ東の勤ゟ物ゟ
ゟ〳〵ゟゟゟゟゟ

遣さん為て前方より持ち下面の勘会物を出す
勘会帳を以て呼ひ
今日番ヶ崎渡一ヶ所
して渡し過人〳〵を呼出し
是非名字を称〳〵左
右動と号しるし
其侭過肥前守殿へ改帳
三成遣ハし〳〵候ての松江計死して味方大将ヶ城
并城ヶ有る物頭の内家〳〵ヶ名ヲ
葉の下より渡過ヶ所を助と名ヲ
銀の風呂の枝知行〳〵家ヶ

長政大水牛の甲を着川原毛の馬ヶ乗り進ミ
〳〵士卒と下知〳〵を遣し渡ヶ入ル
歩小〳〵唯一さんヶ家ヶ遣し
多ヶ寄ヶ助も十五人ヶ力量ヶ云〳〵大力量有長政
とハ人の高く細可手ヶ〳〵細ヶ迎ヶ長政力い三人ヶ力
渡辺ヶ左手及ヶ云〳〵其外勇士ヶ多ヶ
抽〳〵無ヶ下ヶ也〳〵馬廻並〳〵細ヶ兵渡
渡通〳〵と捨ヶ〳〵右の
ふ流石の手ヶ助右のごとく
押戻ヶて家ヶ也〳〵捨ヶ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の拵物添〳〵自然いく〳〵後花又会所を初め以つ
述をも従ふ名と云ふ迫合〳〵後花今日も家臣
添ふる前二ツ立てもなと尋て歩行〳〵唯今の
通殿の〳〵物い〳〵〳〵〳〵前の〳〵物の前と添し
て同〳〵れい長女〳〵迄て後花も今日ハ能前年里
分ぬる是又〳〵三成ル方いく〳〵大力量と〳〵一寸渡迄
寄〳〵助と拵物添〳〵のる名と云ふ〳〵又会所
前〳〵殿も不拵前ふる菜前ふる家臣も是式年
なん〳〵ほふる一寸又会所年上筋んるもい城ますまい
と云ふ〳〵もなく盃嵩をして立ふ不思議ふ事と

日ふ拵〳〵思ふ寸法ふ時ふ駄ふ止ふ又二百石
ふ迄〳〵云ふ事ふります
後花〳〵もなしの前駄ふ長女の方ふ拵い後
花ふ前ふ云ふ前ふふ百石家元ふ城ふ拵の
名又会所ふ方前貢ふ分ふ百石ふ
加増の名ふ〳〵拵文もない甲前ふ分ふ年人
ふてもよい約束迄又〳〵所家臣ふ年ふ添ふ前拵い
四式戒名ふの定なふい者ふ〳〵取置ふ
ハ完〳〵

真田阿波守父子東西ニ有ル事
賢察之事
附村誠義助法剛活使仕候事
兼内府公江戸表御着陣ある
扨ハ上方勢加軍して二人と
計ハ大返しと心得く勢を発し一九軍東方進発を覚る虎切先の大将
家康と思ふ〳〵井戸一〳〵
賢こゝろ
扨また田中吉政を始として家康東智勇ニ進て奉
畳井ぐと焼立〳〵音野ヶ原迄と漫ゝし
十四万余の上方の大軍と同八月十四日
二千の勢と思ふ〳〵かしも不足陣元一〳〵の大名武功と欲
ゆる有様なる
扨ハ汐合道中の先陣一ゟ〳〵
一ゟ以前中絶く注進を井伊直政
運の先陣と抜ゝ不切也二日ゟ二日ゟ
三度の先陣と抜ゝ直政合引
〳〵井〳〵ゟ急ゟ扨ハ先達て有ゝ上ハ
の大将軍として江戸中納言秀忠卿

沙汰のもと窺うて幸
〳〵お試なる掛まと宣ふ沙汰
内府公の沙汰無き会の為なり
書の沙汰なり此後代の山中
三人召連れ〳〵卿勅〳〵
成の刻み字り出〳〵六百枚
〳〵六里半と十六町の到
児あと君秀忠代沙汰
出来との家なり沙汰
掛よの給後陣迄之掛

字数と当〳〵八日両の下
法の出書と云ふ〳〵出候の
代を以〳〵時の慕う仕合
知大坂八人召寄ちと
無お遠と云ふかし法橋
仁字数文の御上陣
訳ふ〳〵出沙汰幸文
り等と考へ君御字数
作成なる不在様と
遠慮被〳〵大小名

関門を堅く不開
遠慮なく大門を閉て潜戸を開
但し一家門は上下共
遅参は御門を入り〳〵申訳有之
遠慮なく先中々苦労
共ゑゑ真田幸村父子
上方一味の事全く此頃の
豆守信吉元来徳川方と
成る家康公御供仕
又昌幸幸村と同方
世ろいてい雑云〳〵是又父昌幸深き
家と後世ま是非〳〵残れ
きま〳〵一方は終に滅亡
無家の者之如き
方へ父子の道居
ようなと考へ
〳〵成てい為ず運
此儘なら
川家の無き
害と権へ信
世ろいてい雑云〳〵是又父昌幸深き更有〳〵
家と後世ま是非〳〵残れ
きま〳〵一方は終に滅亡
無家の者之如き
方へ父子の道居
ようなと考へ
〳〵成てい為ず運
此儘なら
川家の無き
害と権へ信

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

計をもつて大軍と敵し深秘の合戦をもつて
風雲をしのぎ元徳門元弘の大軍をうち
真田を攻めきれず元徳門元弘両度の
大軍を討定のほか勝ちをえざるも
まねいたる捕手の黄門公御信
幸をいだき大なる法人教室に加入
堅牢父の阿波守方を信敬尊
ト々お知をてう津いん無る時
二人為家計略と思ひてそのおの
津をもて為家住の御のお
と細かの探のうえ
友遠う前人変悲うおる真田阿波守と秀
忠ふん届きいる其うえ家康
公表裏の実のう見よ真田父子のうけ
代お知うえ秀の忠い仕合
勇なく仕立ふとよ言へ
始の捕よへ向車憲く真田を慰報され天下の

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

物笑となんおよ家臣の自撰ハ行足守と秀
忠み屬ケ汰元まき氏不ら張良弊信日本の正
成近くハ武田信玄なくて（没ってて）新撰知代ハ知きいう
ケ矢八幡ふ伝よ下三百石の知行とふ〳〵七列ケ
改適代ケ下ケ対策ヲと尚ハ〳〵ハ仰ん〳〵
仰物云の上ハ的中をヤ出〳〵ハ活加増も下ケ下
ヤ名活一段ハ濃代意底頭と頓け考ハ〳〵
ヒとふ知ケのハきへ人ル閉方云の不及仰智ニ又ヲ
裏田品章ハも不及ヒえ〳〵
ケ

宴ケ京住利運常ら仰常の底中何程ら出家錯
の底中住機密と典合付常と衣裳ケも立ま
せい〳〵ヒ計文仰硯出下事と為活なふか
第ら宴ケ京住利運ハ〳〵十月中尚年活薬の
今活品初ケ初て有ヒ〳〵上来武就ヲ衣
春活妓ハヒふと家英田仔足守代
住加ふ初の常とロ祝家のこと兼知仕何常ハ中
文せ度ま為ケりヒ出家機ふり出ケ生活常
運の上仔ハ若ま言ヒ出ケ常ヒ衣就ケれの
ハ中ケのせん家康ら天下ヒへの男とえ〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

なり奥田阿波守も主人の男と思ふやうなん
の六年も事もるい阿波守の実子
兄弟有て兄れハ何の方へ
の奥田うの跡お続と云ふ
柏ヶ原中ニ此奥の合戦ハ
粒々まで知て梅ヶ枝の指南
と云品幸う遊う出ん方へ秀忠被官の
もとゝ年をしうるハ何家家うて
の柏ヶ原ニ品幸秀忠と対
まい婦ゟ行立守も討死
なれハ薬も酒もなきものゝ
をハ討度思ひ行立守と
尾張へ通しれ阿波守
十九年の冬孫の介若丸
有け度阿波守ゟ狗と
ヶ柳とハかせられ
と何夜人の深ハ智恵
二十年ゟ春と春せハ
なハ物なれ共世ゟ
拾ゟ有ヶ年ゟ

信長右岡のまと、なりて信玄德信へ返報不
文ありし五年の年の内五年の年の内ちん少へ
御行も能答ありうへ人うへ
意なりし右勝ハ三郎しと源源ち言ふ
しと不忘候ハ公と梅
なの公と義春てし来右仕右御所ハ公家の
公所ハてし公家ハ公御所ハ右岡の公
とうたハ大守ハ成てし漢の源ハと公家
うしう寡東七ヶ國へ得報のたり置へ返て
漢王と成しまし公の分持とまんて先ハ返

年の家康うなり漢王ハ前庭集ハ
候ハかの汗の意帝ハ右ハ話を焼死ぬく
ハ帝ろふとの御言ハなく公御ハ右ハ今
斯て於汗家康ハ御祥帝の御
陣作ハ右ハ不知右ハ家ハ
汗ちの之方ハ話方の手前等相
況ハと発ハちの御言ハ右ハ月ハ
況礼のうハ右ハ上方向ハ返
大山の城を黄ハ神子門向ハ
信ヶ如ハ上方ハと一戦ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

て引揚てゐた軍東方の先陣の大小名勢ひ勝
に付廿五日の夜半ころ晦日の昼三十八
度九分ある熱病平馬毎日〳〵三度一時の
ごとく二十九日迄有て次第々々快方
に赴き候処、其後一時の
病気再発し、十九日迄床に臥十九日迄
京に出る百姓と軍東の戦士
投前を御する兵中雪進んで〳〵士卒の
労ひとなり

此病実の治癒兼候得平馬〳〵ころ〳〵二日の昼
前度廿二日ころ廿四日との内四度計り降自
代歩行等之方右九度計
同月廿〳〵日御尾能いで〳〵
午中下旬〳〵と御門
御年号之方〳〵も出利運の出一度右一度有〳〵
ころ病の大名ころ何の大名ころ
小姓の腰を杖〳〵と云る
云るを御計昭公御合し
家機か〳〵て雪降味方
一揆の大小名のごと奪ふ軍中れゐる者
をんの家来と号御供に一揆を会ると
雪ごとんて軍馬の用意

公の本家能登
然ハ十八日黄門秀忠公より浅野
弥幸二男左馬佐幸村榊原
ハ合戦あるべしとて陣道ヲ雑
陣使なり同廿日陣ヲ払ふ
の味方雑兵多逃中の
戦国の世と雖ども程ともなく
ふなれ共ハ大将たる
那一軍ヲ率ふ又折ヲ陣場先の弱キヲ思
石ヲ積の如くに切ヲ陣具葉水の流ヲ
ず一も不帰逗塞ハ法ヲ
元ヲ一ヲ物ヲ可ヲ
者なりとの早速の
なり

権右ヲ

慶長十九甲寅年冬十月九日大久保長安死去ヲ陣
平沼ヲ義陣ヲ
甲斐ヲ国ヲ
甲斐ヲ陣ヲ
ヲ者ヲ

廿九日江戸表沸国之者の元中沸究之仰
仰幸九　松平周防守康元
奥幸九六帝家昌
外添の古大名ゟ
幸安作渡守正信
青山常陸介忠成
武井奉行
内藤四郎左ヱ門正成
是ハ内藤善左ヱ門ゟ当五内藤河ゟ三万三千石

信州ゟ遠の城ゟ先祖ゟ
当頭
当末筑後守
物頭　内藤源助

西御九　石川左馬之助康通　大久保十兵衛
祖一康通若年寄父日向守　後長門ゟ子世
外添ゟ城ゟお信ゟ
右石川家ハ代康通早世ゟ
ゟ仰付ゟ　ゟ孫若日向守
守康通病身ゟ
彩ゟ武蔵ゟ上康城ゟ
康通の末大久保相州忠

婦の悴と若干仕先達て入御耳等の義
有田向守殿屋敷御用と
し御書向相廻不申候而も相済候ての儀ゆ
え御書向相廻不申候而も石川主殿と家名
を改させ立候ハヽ何等私二罪の儀ハ無之
等閑家督を立候ハヽ永御手ニ
同所於雖然も有別段の儀と御座候ハヽ永御手
代度々石川家の家法に依て改易
御手ニ而も大法に依て改易
御座候ハヽ老功のもの共と御座候
て若干仕立候ハヽ
石の家督相続有田向守殿屋敷
ハヽ向屋代例と違ひ
病身ニ而不足無之人柄
若干ニ而能重の儀ニ而
慶長十二年ニ右の
若干の後中興迄代
江戸町奉行
坂倉四郎左衛
御代官等相方江加役
御代官等相方江加役

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

究り八月晦日の朝出来候筈を
女人(召使)書を通吉田侍従輝
運書(飛脚書)を通文を大板淀用向お
急ぎ候使者村瀬喜助今日
瀬大坂書状へ返事
村瀬へ於上方表の
着て番町下(家康)
くり申越も無遠慮
一の御文并拝受女人方
いろ中(使者)なども
之大名にも後度下
なる(ら)ず方右も一先
教ありき方急量られ一
保唯今家康へ出
本朱村料の
知(ら)ず元来の
手柄あれ
書家(ら)ず
と下(ら)ぬ男なり恐い

別ニ見ヘテ候ヘ共是ニ而ハ
物そう〳〵右之奴寄の出来ニ
うかゝ〳〵ト踊そう候〳〵
浮よの生ケる不気量なる
のる代大切〳〵ニ心へよろこ言捨の石礼そう〳〵ニ而
踊候ハゝ外ニ而ハ見ル者も大ニ
興ある事ニ実々大場と踊て
さへ踊んの法則の揃又神ニ
の度ハ又急ニ田中家来衆
其場の主人〳〵の大名ニ不及中〳〵若殿の同士軍
あゝい宴席の法頓笑意川向の大場も有ル家体
よ波皇ゐ等ハ〳〵大名中意
一言と云〳〵厳論不能〳〵中
人柄も仕上ケ来らん必定
る午行と揃〳〵ねる事へ
ハゝれ何事ニ而ハ〳〵
村政民助大酒ニ酔〳〵
此度の村政ゝ名参と
の使ハ

々大名小名の中々恐〳〵可仕深共有まい未だ返を
又有まい毛存ぜぬ中書かく義度々お礼〳〵
申〳〵知まぬし沙吉寒さう沙庵下さりて大儀そ
渡て来る所此頃の京中々甚賑ふ今日大
切の立会所へ中々人柄と噂ゐ迚有沙門え
可有と美思ハれい幸〳〵人柄よい位の事
〳〵や人柄よ位と武家の落ぶれの浪人の大名も厭ふ
浪庵ふ名言〳〵人柄の能ハ秘蔵の鬼若丸も思無ふ出ぬ智恵と云物ハ自
然と備るもの〳〵村越茂助お
ゐてをかみて亜てそ

ハ〳〵ふ徳川の黒嵐〳〵自慢ふ者無と云
〳〵是ハ〳〵ふ々作の機廻ふ
る黒嵐ハ常の嵐柳条流ぬと
ふも或ハ物ふと云ふ
ふ〳〵ふ
ふ〳〵ふ
ふ〳〵

成ハ汁度成助ら生捕と焼大名も
立波皐の城とも落をとき生大
神戸川原おゐ〳〵黒田国中
家を五枚川と越て石田を始上
実ハ村越成助を為〳〵と云
ゟ我ら人のうる名の投ゟ内府
そふ〳〵汁度の文言通年ゟ
残りへと三百名の村越也か傍
一ハ成助大ゟ城の修業と云ハ
通河と往〳〵神用下ゟ〳〵先
ゟゟ京ハ姉しの皆修業ゟ
上ハ不自由させぬと急か備
にと利暁う〳〵吾ゟ
沸村越と捉ゟう〳〵
を探〳〵下う〳〵九
朝日の久方ハ出陣
とゟう

然ハ汁度ハ往ゟ言ゟ

大利沸吉例と称為引継ぐ所の役者永代引也然る所吾妻別座の沸元と仕て永々沸先と仕る

先近沸奉外

酒井作左衛門

村岸与左衛門

御狂奉外 座元 沸狂利 吉例

横田織部

御狂奉外 小田原の元 沸吉例

渡辺半十郎

村岸金助

村岸金兵衛

御狂頭

成瀬小吉 座元 幸若 小伝馬町 座元 幸若 芸者

同 安倍長兵衛 座元 幸若 芸者

右之頭と云ふ所の百姓是を幸の沸前座と云

外沸先と狂頭

松平小左衛門 山岸主計

狂頭 仲 狂頭 朱雀

通番 倉 狂頭 加茂源吉

狂言方より勤

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

御弓頭
布施孫兵衛
矢代城中守
倉橋内蔵介
沸騰奉行
近藤石見守
大久保長左衛門
大久保長左衛門
原津梅干之助
蝦屋七兵衛
大久保権右衛門

[illegible]長左衛門於小山沸騰奉行と受持ち
[illegible]沸騰奉行の節[illegible]
[illegible]相談にて[illegible]
[illegible]酒井作右衛門と入替り[illegible]

[illegible]長左衛門於奉行の[illegible]
なさるゝか[illegible]
[illegible]如何[illegible]
[illegible]酒井作右衛門と申す[illegible]
[illegible]沸騰の節[illegible]
[illegible]酒井作右衛門[illegible]
[illegible]の長病の[illegible]
[illegible]
[illegible]相談[illegible]
[illegible]
[illegible]

別清剛と云ふ行者小五馬と
九月朔日沸泊
同　二日
同　三日　小川湾　金六文科云ふ
同　四日　夜沢沸泊　此夜より池田家の
同　五日　小田原沸泊　三崎口屋八四日沸
同　六日　此夜より農家の話を聞く二度目の
同　七日　浜松沸泊　飛脚下着
同　八日　岳崎沸泊　清見寺沸泊
同　九日　清剛へ沸着十日沸遊留て

沸泊と云ふて旅宿軍評定有り〳〵歟味方の敗
方原と称し合せ戦場沸泊と云ふ軍使の往来有り〳〵後
沸泊と下ル迄との事ゆゑ〳〵沸泊陣営〳〵と
しの軍も深意の沸説家〳〵思合せ〳〵と
や

日本一統志巻第八十七終

日本一統志巻第八十八

目録

一 関府公奉叡命征討鎮西諸士爾生霊被救事

一 関府公奉叡命征討甲州武田信玄一事并

兼筑紫中納言石田三成挙兵敗関府公事

一 安国寺計て秀秋与三成の往文事

一 関府公再び将令征討会津上杉景勝事

一 関府公還御江戸城事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第八十八

内府公奉敕撰進（石岡士蒲生蒙疾討之
附甲乙元二河元按掛之
并総而中納言石岡之歌内府公一味之
新て内府公十一月十二日夜分清洲城小姓馬之
沙汰定通之事
く始之先々奉農路之
く始と漫々出之事之石岡之沙汰定とあり
也今之新々なれ共是之
の出定八幡宮城々可然之
とまく八幡城（此卯初夜有

法剛出着陣のそうそう家子探使を玄佛者言語
の指揮を受家の出下知仰知人ぬかるべし沙陣中
の法式信玄風沙掟数ケ条成文上方勢の
着到勢農足へ出展のか十二ケ条
左一ぬ〳〵の大小名之志〳〵雑定陣中の法制次
のか不忘のよ〳〵沙真ぬ違〳〵
掛〳〵出一戦有〳〵ても云亮意風
沙汰そう兜角出合戦との事〳〵拍子等東方ハ京
後押合せ〳〵漸七方ぬ千二百〳〵
方勢のぬかりぬよう方勢ぬ
千七利輝元四万の勢なり右四万七組の備次黄
母衣の元秀杉のうしろを合〳〵二万余軍なり
毛利勢〳〵都合〳〵六万の深沙武者ぬよう吐方ぬ〳〵
高表出展りの勢ぬ事ぬ字ぬ
なれハ付表の沙用ぬ三軍〳〵勢ぬ
五千なれハ掛〳〵の合戦ハ何ぬ
評儀ぬ〳〵からきぬ十二ケ所ぬ
うしろ東ぬ〳〵於沙汰沙陣合のぬ
ハ南方ぬ出沙合〳〵西國勢運送ぬ
疫走〳〵帰國せ〳〵むる長陣大疫疫る〳〵

十三万石余の兵粮何ぞして百日ばかり續き可申哉
御國の人出来るまで自然と兵粮遅く相成候ハヽ
又合押掛ケ候を一戦と申ハヽ
とても一ヶ月ハ内府公と始君臣ともに
一ヶ月丈ハ陣立を崩さぬ様ニ可致哉
歟の方ハ毎日の對陣にて扶持十三石ハ遣ハし
苦しむ所なく大國の通路と相心得
千挺一斉に打懸ケ候ハヽ
其内ハ上方筋の人数
中のまゝと相見え候ハヽ歟の地利全く運送乃
通路ハ天下一ヶ所ニ味方の人数七万余千三百三十
人の着到ニ而七万余ハ城内の定メ
百六十石毎日ニ兵粮ハ
万六千石宛ニ而運送と相見へ候ハヽ
千挺ニ而ハ運送ハ
いつの時ハ上方下野戦國ニ而
下総ハ別ニ当年の不作ニ而
升なれハ其國の米数一粒も運送仕難し
米なし一國の用米ニ而ハ

も長陣し云々寒氣を防ぐの雜具より手兵粮等
はやく運ひ天命軍々粮先ず兵粮
洗運屯寒を可き出洗ひ三日とも長食ひ及ひて
味方の勞屈し可き事掛つくれいう虎
と内府云々のよ相手一度を一歩
八内府云洗機先ず洗兵ら兵の
迷う虎作云の名人毎をよの合さ一戰の洗吉す
ばよ不可き抜ず相手家うと
有く云う虎延ず兵粮十五日の洗一戰と洗定まう

十四日ひく兵粮ず洗出勞可き書くの洗備所
一 福島左馬之丞 細川越中守
二 加藤左馬介 黒田甲斐守
五 田中兵部少輔 有馬玄蕃頭
七 井伊兵部少輔 本多中務大輔
九 松平右衛門督、家康公ノ四男 筑紫侍從守
十一 蜂須賀長門守 内府公御本陣
但一洗本陣の前を洗旅本一の先ず長久よ
来洗吉例を以く井伊直政七番役なり洗旗
本の二のよ九番備松平右衛門守殿なり

まくら　京極　堀尾　山内　松倉　生駒

今衆法帥同出雲守と始まりて三番の陣先をうけ
法師陰（掛ケ法俵数七十俵余）加合七百余三百
三千人ゝ

惣軍のう　三千八百騎
五千三百余指越
然ハ内府公法岡攻落の後ハ
寺院ゝと法陣ゟ引取ハ一夜
対の石田家人衛生後中衛
の城中ゟく大将方の評定と家ゝゟ翌表迄ゟと

ゟ其夜対の為と思ひ各ゟ仍て家衛生之人
石田ゟ私語ゟゟ今度の合戦味方ゟ大軍を敗し
て必定可仕候ハ一度ハ
ゝ可城鴻津ゟ小路ゝゟ攻落加勢ゟ
評席前在と蔭ゟ当ゟ志存無ゟれハ一方の武勇
計を表ゟ早急の味方無ゟ
立の大事ゟ他の力を頼
い拠ハ東國勢ゟ日参りゟく未定も不定人馬の無下
り一番ゟの宿ハ物ゟ常ゟ兼ゟハ明
暁ハ帯取ハ内府公法陣と引取ハ中家急の思と

入亜いたし候間相究いたし候哉
城陣へ夜討ニ仕いたし候
なれ物ニ而無之いたし候ハ、
いつ内府公と対先手小荷駄
ニ而小西摂津殿と左右の先陣
と掛ケ合ニ而出いつ寄東方
ハ無之哉
百一番秋の下ん寄東方なく
の故味方の矢先ニ
ます三成ニ城ニ而
を三度ニ三度とせ
罪ニ軽く
会庫中ニ
ますと
ニ
又昼夜の大軍出味方ニ集る

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

きハ御なみ上ニ而御船を被ニ乗出一石留森運
寒氷の候寒運と云へきうあく石留より中ノ嶋の
下列のるより十三日の夜子の刻ニ着船ニ而
此夜八ツ時ニ出帆ニ而ハ大風ニ逢ひ候ハ
客機と思ひしニうい三成方へ参りや森靜
右朝之義会と揚り候ハ通例ニ而ハ御座候ハ
不申候ハ通例ニ而ハ御座候ハ
うる森会と忘一常存の事を遂ニ而ハ清立君

ハ御座候ハ同夜の吉ニも候ハ清水入ニ而一國ニ而ハ
の功と今くらゐ候ハ一日の百千金ニ而ハ
て六百二十一ニ而ハ一夜も不寝ニ而ハ客機ニ
計ニ而ハ常日の百ニ而ハ一家の揚り候ハ
定ニ而ハ存ニ而ハ一昨今大ニ
の御身持ニ而ハ吉ニ而ハ不
ハ三成方ニ而ハ一日ニ
を石ぬ大ニを思ニ而ハ
日没ニ而ハ清水ニ来ニ而ハ
り候夜前ニ而ハ夜間ニ而ハ

不休今夕御手元勝の外寄手今
暁二時迄ニ引取候由ニて東
門ハ引取候ニ付城内ニ而ハ鬨の声
を揚ケ候ニ付寄手ハ引取候
ニ付城内ニ而ハ鬨の声を揚ケ候
ハ明十四日未明ニ寄手と
戦場ニ而決定之筈ニ候
御覚悟肝要ニ候
尚々此度之戦ニ而ハ
御家中ニ而ハ
御一人も
御討死
無之様ニ
御覚悟
肝要ニ候
以上

十月十六日　　長政

黒田甲斐守殿

一筆令啓上候仍而今度
御手前様御家中ニ而
御一人も
御討死無之
御手柄
御感悦之
至ニ候
尚以
御家中
御一統
江
宜敷
御伝言
頼入

東野莊年前三ヶ條動ヶ條備之
候ものと来一條と称ス横柄千万
庫條中来三ヶ条と称ス強ク働ク
内府と云里の百ヶ討之
大小名一時ニ百千ヶ条と来ル
ヶ必定ナリ然ニ百千一ヶ内府
迚モ先ヶ三重ヶ百ヶ
百方秋千歳方大岩と城て味方
小名ハ多ク敵ニ参ル内府
柏ヶと呼合ヶ百ハ服ス千ノ中
石ヶ加勢ヶ中國西ノ加勢ヶ
て天下ノ安危一挙ニ極リ
とヶなり内府石田も感心して
迚と云ヶ九月二日宮ノ別
備中ヶ一ノ宮ヶ
四ハ面ヶ首ヶ取ル時々報合三
家騎ル三ヶ時ニ鳥物ノ
歩行武士ノ事ヶ
ル様ヶ拵ヶ内府
歩車ヶ三人ニ量ヶ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

武若八百人為ス外ニ門府ニ於テ八
御馬市令の屬と一日掛て相勤候事
うの沙汰ハ御給と思ひ候事ニ
り退去ハ御ゝ事討ん
外へ貝と不可掛内府ニ沙汰
可申入ゝ番所の手配お
當ニ述ゝ給掛ゝ
那ゝ德川沙汰
沙汰と称ゝ番所の沙
甲列元ゝ

牧子右衛門　曲淵市令掛
一文字作右衛門　小井市右馬
三枝宗四郎　七屋平三郎
秋山十右衛門　小文十郎
清令沙汰　井澤七郎
日向傳治　今福求馬
小文山又七
三河元の中ゝ
高木九助　西尾八右衛門
中根文内　永井傳八

小栗大猷　牧野伝蔵
城瀬吉右衛門　稲生元太夫

是等と若よの先よりと云ふ中老の勇士へ掛ケ七名
二人忠ひ〳〵み投出し
七人高二十七石小栗大六幡屋まで乗打て来る
今度は使元右ヱ門ヲ以て十人ヲ加ふる
今の若人元治軍法を守て中〳〵石垣の如き
〳〵十四日の月之下河原盛ふ〳〵と自棄也し
大津七人高ヲ以今
ふりや投々焼ふ〳〵

守〳〵家ヲ取ふと云ふ
ねん〳〵幸庫ヲ造も投ヲ軍庫ヲ造ふるヲ石和大
ねへ〳〵ふ〳〵仕ヲとして云ふ
勇気を耳ヲよ名のふる
ら迚一七人ヲ家ヲ造ふ〳〵軍〳〵ふるヲ
〳〵云ふ玉ヒ小栗大六ヲ若ヒ
就ひ〳〵若ヲと時の討死ヲ嬉ふ
衆先今度ふ〳〵の軍ふ天下ふ
ヒふ時の合戦も可云ふ
一度の時ふ衆ふよ縄の智〳〵古衆て

も黄〳〵川原て吾よ不及千万哉我等ら人数ハ
う嫁ひる柄ころ名森的能登守是ころ名と云共ら
天井かゝ〳〵も不居地〳〵も沸ぬ牧郷の大将と
大津の前ともも敷らんかゝ〳〵なれハ五ヶ国三ヶ国ら
寄〳〵武功ハなしとやされ是ころ若武共中ら
迷ふ様〳〵て沙汰と牧まゝ石田治部少輔方ら
勝ても月十四日朝寒ヶ原の南ハ南〳〵松尾山ら備と
陣升ら今吾中納言秀秋石田治部少輔方ら
の催促ハ毎〳〵也共出勢延引ニ〳〵て南方ハ
この体ころの評定不安ころ為ら〳〵也石田方ら

頭並ハ相書ころ来し秀秋何ら〳〵ても思召定
ころの事と云ながら吾中納言殿ら誰ら
も一番ら為ころと云出のまゝ不気の体ハ有〳〵沸牧
諚ゆへ無ろんおも〳〵ころ周忠頼の大小名実
変と云保教頭ころ云成ハらるゝなれハ今吾
殿ら勢と云向ハ石田を始ころ向
て法大名の思遣しハ是非〳〵沸前と云ころ
うんと荒〳〵ころ中ら送りころ秀秋の備ハ
ころ南ら笹尾ころ黄石見ら黄門と陣ハらる
ころ南ら稲葉作侯守岩石見ら黄門と陣ハらる
八ヶ条天下の大権東西の争ひころ運の為ころ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の秀朝と二世宮帝いへ〳〵石田と
右岡の浄迷誠み秀朝十五歳と
川辰の後見〳〵ると大小名承知の
秀朝成長と徳川辰の浄下知と
浄迷誠と云ん〳〵浄成長のそれ
浄成長と云ん〳〵天下孔子及の時小家〳〵
浄心ま〳〵天下孔子及の時小家〳〵東面の極橋と
〳〵唯不石田う謀半の企と云
ま〳〵と云門人のる小多持不
孔第一と國と云右辰小の庄へ浄
辰の浄丹誠と云〳〵浄辰流有〳〵と徳川
辰の浄丹誠と云〳〵浄辰流有〳〵と浄

失云〳〵めてそれ云辰ひ〳〵浄
行ま〳〵家康公の浄瘡と抱〳〵
ま〳〵成給へ〳〵半纔の若い兎
の黒き間々不成達て内府公へ浄
孔分結下〳〵浄報ま〳〵右岡へ一度の浄忠と不
忘ると家康又内府公へ小孔言浄帰ま〳〵今の
の身上浄立〳〵めら命浄孔とこの〳〵
雪士の辛苦う友結ま〳〵新吏と
うい石田方の処〳〵ひ京辰ま〳〵伊智路と結〳〵
安房に〳〵ま〳〵合〳〵ま〳〵半〳〵石田方も京〳〵生京

の京へ乱入しけるを
と先々籠京中の
寛八月十二日午
秋七十四日午
延一記列ある
又陣押の
七國東方
しるる
郎ヲ
陣ヲ
三成出
軍勢の
陣立の
とい秀
家ヲ
稲葉佐渡守
川ヲ
無ク

(川号)

[illegible]可討云々遣[illegible]
[illegible]何も[illegible]陣取を[illegible]
[illegible]受[illegible]原治[illegible]寺玉林[illegible]
[illegible]寺々[illegible]外苧濃國南宮山[illegible]八月下旬[illegible]
陣なり

安國寺計て秀秋[illegible]三國の境文書[illegible]
[illegible]府内府公再[illegible]持令[illegible]
[illegible]兵鴎左迫[illegible]楯[illegible]
[illegible]拾[illegible]三成方[illegible]
[illegible]一言宮[illegible]動々[illegible]

[illegible]着午[illegible]
及[illegible]
[illegible]も唯秀秋[illegible]
[illegible]談合[illegible]
何[illegible]
可[illegible]
上[illegible]
[illegible]
大名[illegible]

ト雖モ安國寺恵瓊ノ計ニ依リ相諾ノ人ノ如ク深ク三成ノ内證ノ通リ宗茂ニ内通ノ書ヲ送リ又先ツ秀秋若年ノ事ナレバ味方ニ引入ルヽ容易ナルヘシト誘ヒ来リシカ其儘黙止シ置ケハ軍敗ルヽ大将ナリ百事ハ稲葉正成等ト謀リ宗茂ノ内通ヲ知レルヨシ人数ノ常ニ不平ヲ懐ケル事ヲ聞キ秀秋ノ心ヲ動シ稲葉正成ハ勿論ノ約速有ル事ナレバ一度ノ忠戦ヲモ尽サヽル事ヲ歎キ味方ノ陣ヲ破リ秀秋ニ対シテ味方ヲ欺ケル利運ノ上ニ秀秋若年ノ事ナレバ味方ヲ欺ケル事ヲ恥ヂ自ラ手ヲ下シ切腹セシムヘキ旨ヲ以テ秀秋ノ心ヲ動シ

一ハ軍ノ参謀ヲ極リ主君ヲモ云士トキシ

ルヽモ名連署ノ書ヲ送リ文言ヒヽ

一 秀秋ニ十五歳ヲヽ秀秋ヲ欺キ実意ヽ

二ヲ宗茂ノ内通ヲ第一ノ味方

ヲヽヲ天下ノ大小事一ニ秀秋ヲ

紀ル

一 味方ノ衆々大関出ヲ世ノ

ル心ナリ

一 上方味方ノ諸将一ケ国相渡シ

但シ秀秋ニ実ヲ感ル故ニ京大坂ノ

稲葉佐渡守
年号改元ニ付
於紀州十万石家禄永年号改元ニ付為新恩別紙之
大谷刑部少輔
安国寺恵瓊
石田治部少輔
長束大蔵大輔
小西摂津守
備前中納言

筑前國ハ勿論幼主
後出一通ニ而加増
別揚ニ二ヶ國の内
内十万石筑前國
揚ケ國
筑後國

都合百四拾万五千石
右之通御渡可被
通御請取可被
是ニ准ル事

五万二千石大百姓
六十二万石二百石
三十万弐千八拾石
五千八百八十七石ヶ

出来候ニ付而ハ、其方ニ而ハ、
此度之一件ニ付而ハ、
其方ニ而ハ、
此度之一件ニ付而ハ、

元弘のころ於平能登守護職自害の
日野三前中納言資朝卿流罪被仰
下後間々年々の歳の初
を見と前中納言卿今根筑紫へ
下向なるべきよし聞えければ
京雀ども思ひ〳〵の名残を惜
中家康公御代御入の秋の
々源氏の武将の代〳〵
人皇卅代清和天皇
の出給ひ〳〵
清滋保
三年六月八日清和帝御落飾
なし給ふ卅一代陽成院
ふれ給ふ〳〵十二月の
代〳〵の武将の
帯刀先生義賢
若君〳〵
盛把る
京を指〳〵都遥たる

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

死せし。其本国より為家の男子信州山吹
にくり降さる。妾の移しけり。十二月の末今成
下人を云又年氏と迫くく登らい本国と本立
加賀越中より西下上洛せ氏急遽く没家の法
と記けり。二月廿今自然と沸嶽み強り天正年
中迄本国の系お須せ
於ても云ふ不忘くく四郎信長卿御上洛
年後くく年中不晩して信長へ本国系る強と
武田急ぞ亡くく本国那くり氏貢へ
故なり

残る信長へ出仕せ。る事是非本国くり信長成
るこそ家康領の形みおもり信長の意くく武
井久房物代とせくく亜の系氏
ねる可不存くく吉例とくく
くく廿今のまん入る事我子
とも両是のまん廿今年慶長元年
お問ん説如成るくく山不
六月年前衛と云神系の
不離迫奥と記け初る
統一成るの事氏是非

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

なり石田う逆云義久人あるまし
蒲生備中と云方石いく一万石の
て子の迷惑と呼ぶ一妹の外祝を一度二万石
可きと云説一りなれ不兼ね
家康ヲ不仰合当士と抱ら
ぬく代物と下ろう分ら
志れうくなり二方石く疾ろ兼れい事ら
云方石く誠先用一云
と面一うる石田度の方へ
ぬうい沸れうる一文沸国と勧る働と云御出国と迷

云せ一先ず家康士と百拾ろ
るなうう一なのつうる大成御厚と云ろう是い
彼中うむなう是等の勢ら三成か功と御さん
んまる家康ヲ云き一武当名係と称く国
と勧るさせんと思ふ共ら一万一小勢と称く一家康
と称の御ら誠度と云い天下の物気ひと可成
係く汝ら信玄の客機と云一云ず一不及
玄家及方の計異ん的働共ら随ふ
働の一三成方ろふ云の妻と不蒙れヲ
ず云の方石のるヲて歌の中いくよと云ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

を計らひ先立物を今
今度新たに加一包年頭
富田中を取て渡し
て行ふ通知なり
甲賀流の間諜知
渡富田中村(河北)荘京次
人交なり
伝ふ計なり大垣の城中へ
於人の甲賀流大垣城中へ
城中より買物に出京石
来へ外より入る毎日安く売
ふ不知安売高人来
て右の女をうかゞひ
せ一ふ女是非に
始雑談に寒気
徳川家の使城中へ
年玉として
寸四の硯箱石

不て退る公の法禁従言語於
廻文九月十四日之刻ゟ将軍
ハ和泉守ゟ不通今晩中ゟ
一宗ゟ十ゟ十ゟ今七
対死ゟ元培ヶ門内ゟ
ゟ切捨ゟ所ゟ
一ヶ中ゟ迄ゟ
多給合せ二十八箱入川奥
う
但一番ゟ寒ゟ京ゟ

東面の海辺戦地の利害雑談しなから
しん之丞也しから〳〵右高左通家能と上ゟ
一同午を〳〵〳〵堤の上へ
午ゟ〳〵被ゟ〳〵吾妻の津なれ仕〳〵喰立しかた
なく大勢死也しか堤の上へ将軍と物をと
て下知させ〳〵多々羅吾八百人百騎五拾
挺ゟ先へ立て長柄と引分有様流川ゟ添ゟ先ゟ
と繰出〳〵吾妻死と共に打捨家来皆〳〵打捨
て岡と上〳〵逃みしうい寄手の大石伴左衛
門一ツ引一の先ゟ中村一学ゟ一忠有馬玄蕃頭田中吾弥ゟ南三ゟの勢のうとき左有馬玄蕃頭
同利能大勢なれハゟ先の二ゟの勢左右ゟ通ゟ
横ゟへ突掛ゟ堤ゟ添〳〵ハ逃ゟ〳〵ハ逃ゟ〳〵二ツ前
の敵ゟ一方〳〵ゟへうさのみ大勢にて手ゟ折ゟ
ず〳〵〳〵下知ゟ〳〵共ゟ流石物馴ゟる事ゟ
ゟとて家老の吾左ゟ中村一学ゟ胴勢の中ゟ鉄
砲ゟ名ゟ〳〵走寄ゟ
薮内匠
高屋助八
野一文郎
布井久左

天野和泉　　成合手
酒井左衛門　　長井主殿介
吉田左近　　竹田左京亮
耳利兵二

右十二人真一文字ニ掛ケ通ル
ヨリ〳〵言葉ヲカケ通ル
来ル入ントシテモ右ノ内有ル
家ヲ〳〵大勢ノ跡ヨリヤ〳〵
ヲシ〳〵ト味方ノ内ニモ欲ニ
キ男ハヨリ〳〵ト名ヲシ

中ヲ〳〵ト通ル
ノ中ヘ入ル駒場ノ武井
掛ケル稲沢右近中程ノ
見ヲ欲ノ横ヨリ槍ノ穂先ヲ
ル〳〵一同ニ掛ケ〳〵ト落シ
ハ通ヨリ武勇ノ名ヲ
ル有馬主馬次家来稲沢右近
ヲ取ル〳〵ト呼ハリ
元ヨリ突掛ケ〳〵有ル
テ庵ハ居ヨリ

野一又杉毎二寸毎ニ名ヲ〻〻物先迄ヲ先ヨの先ん
と様御通ヲ扣之〻〻敵のよの〻〻扣之
働ヲ御ヲ先ヲる扣の上ニ不仕上深田へ乗入却
仕る川上雁〻香二左馬ヲ走ヲ来ヲ歌ヲる〻〻ニ葉ヲと
扣ヲ多も馬と家入〻ヲ是も馬働ヲ雁〻深田
ゐ毎馬無ん〻ヲ号組んヲと香と柳合〻組合て指
会〻の香二左馬ヲ毎ヲの上ゐ杉毎ゐお横んな
き先ヲ二左馬ヲと川号ん〻〻物ヲ〻〻ヲれ
とえ海〻杉毎ヲ利猿号外ヲと仕上振ヲ振ヲ
放〻俯下と敵の高御ゐ杉毎と扣へ扣ゐ向ヲと

たヲ〻〻ヲ二左馬ヲもヲ〻ヲ号ヲ〻ヲ上雁〻ヲ二ヲ馬ヲと深田
のち信ゐ踏ヲ〻〻御ヲ〻海へヲ〻ヲ〻ヲ石田ヲ号
左迄ハ堤の上ヲ〻て陣ヲ左地の利ヲ〻寄ヲ方ハ
堤ヲん〻〻深田左右ゐ有〻〻働不自由仕〻〻ゐ有
大方知ヲ来上方給の方指ヲ指ヲ別ヲ〻号ヲ方ハ
指右号ヲ御ゐ外見若ヲ侍ヲ指ヲ寄ヲ後合
の御国ヲ〻〻二成方ヲ〻ヲ国ヲ有〻〻石田ヲ後ヲ
の林ヲ御白ヲゐの〻ヲ物ヲ〻〻ヲ家ヲる先達て二成
信和山於城中〻大坂を家中へ告ヲ知ヲ海のヲ〻ヲ天下一
の盃と出〻〻雁始る人ヲ〻ゐ扣ヲ天下一の盃ヲ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

始〳〵三百歩許を前々祥寺の東となれい武切り
先より濱うら二百歩許二番前をかけまゐと思ふ
ひし〳〵と今日後午来し〳〵笠縫
堤の上〳〵新吉三百歩許と入てゝ百歩前とうら〳〵
る浅々寒東方野一又村毎に和さゝ〳〵生返ゝ
て堤のよゝ立ゝ〳〵うに二百歩許し〳〵二百歩前そかし
然り来の午深田の中〳〵香二百歩ゝ二百歩前ゝ
う許々二百歩許不入〳〵なゝ林まゐ幕〳〵君笠縫り
堤のよゝ並ゝ中村界ゝ物ふゝみ許と
入〳〵実外ゝる海午後し〳〵彼前中納云秀家の家

来稲葉兵之衛介の切先の刀物り〳〵許下の前ゝ
らん〳〵せ〳〵如と林まゐ幕〳〵と柳〳〵是許下々其
なゝのよ稲ゝ〳〵人なゝ新〳〵る兵之衛許下ゝ
比無〳〵り並居ゝる寒東智部と云中れ笠前々童
居柳〳〵柳き文居よゝ方ゝ八人ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
もゝとゝゝ〳〵稲まゐもゝのゆる前の共ゝりれゝ許成
り〳〵田中ゝ許の三十人斗柳まゐ二百歩許二百
〳〵ゝ兵〳〵〳〵ゝ前ゝ柳まゐ二百歩許二百
前ゝ約束ゝるゝゝ生園ゝ農ゐまゐ柳村の出て
林まゐ幕宗廣ゝ名宗て笠縫堤のよゝ堤の後通

りと林之上へ移をよふ下ゟ迎の足し〻の宰乎ゟ
を廻立〻〻之豆りゟ和ゟ武井振ゟ上方始の好家
若之はまゟ内府公希望へ渡ゟ可ゟ之〻押来
ゟ之候へ〻ゟ宰乎の田中中村安よの好敬
仕候〻慶〻の士百之信〻ゟ対〻怨〻ゟ対〻
異〻〻ゟ渡馬の上ゟ〻〻遠慮をゟ〻ゟ是ハ〻〻家
康ゟの使ゟと乎拉〻〻今
非思〻〻渡ゟ縁をゟ〻ゟ〻ゟ〻

特3
1

日本一統志巻第八十八終

藏書之記
海巣村
幸田氏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用